

# 「東西蝦夷山川地理取調図」における アイヌ語地名の一考察

内田 実・春木まり子・堺谷美香・黒沢恵美子

## ま え が き

北海道の地名の殆んどはアイヌ語を語源とするもので、明治以降音または意味による漢字のあてはめによるものが多い。

アイヌ語の地名がカナで表記された初出は幕末で、奏憶麻呂<sup>(1)</sup>・上原熊次郎<sup>(2)</sup>・松浦武四郎<sup>(3)</sup>・伊能忠敬<sup>(4)</sup>があり、明治以降になると永田方正<sup>(5)</sup>・チェンバレン<sup>(6)</sup>・バチェラー<sup>(7)</sup>・金田一京助<sup>(8)</sup>・高倉・知里・更科・河野による「北海道駅名の起源」<sup>(9)</sup>へと続く。

アイヌ語に精通し、現地調査の結果としての地名研究を大成したのは知里真志保<sup>(10)</sup>と山田秀三<sup>(11)</sup>である。山田は「アイヌ語地名分布の研究」において北海道と東北のナイとペツ、メナをとりあげて地名分布の特長を永田方正の北海道蝦夷語地名解に収められた6,054の地名からその分布を詳論した。<sup>(12)</sup>

北海道のアイヌ語地名の収録数では永田よりも松浦の山川地理取調図の方が多いのではなかろうかと考え、その地名を採取し分類する事によって、地名の地域性があるか否かを調べ、代表的地名若干を取り上げて考察した。

山川地理取調図<sup>(13)</sup>から採取した地名は8,411で、永田の地名解よりも38%多い。そのすべての地名から比較的頻度が高く現れる地名を選び出し、地名の場所による出現頻度に特長があるかどうかをここでは5地区に分けて調べてみた。各海岸線の区分をより単純化して、北海道の脊梁山脈と大雪・知床山系の延長線で四区分する方法をとり、石狩低地帯西縁で半島部に分け<sup>(14)</sup>、そして地図上での地名を沿岸部と内陸部に分けて採取した。松前と十二館周辺における和人の居住地には、漢字の地名が記入されているので、歴史的経緯を考慮して除外した。よってカタカナで書かれているものに限ったが、1文字でもカタカナが含まれているものは採取した。これらの地名をデーターとして登録し分類した。なお地名の分布の特徴に入る前に山川地理取調図とその地図からみた集落数と時代背景についてながめてみよう。なお使用した機器はマッキントッシュと日立3050である。

## 1. 松浦の東西蝦夷山川地理取調図について

松浦の東西蝦夷山川地理取調図（以下松浦図と略す）は「伊能某ノ経緯度実測併高橋某ノ地勢提要ニ原キ」と凡例にあるところから地図の原形は伊能図である。図のできた安政己未歳の安政6年（1859）にはすでにシーボルト事件で大日本沿海実測図のどれかが持出され、嘉永4年（1851）に日本国陸海地図帳が刊行されていることから、図の凡例に書かれている高橋某は景保であり、松浦図の原形の伊能図は要人には入手できたのである。

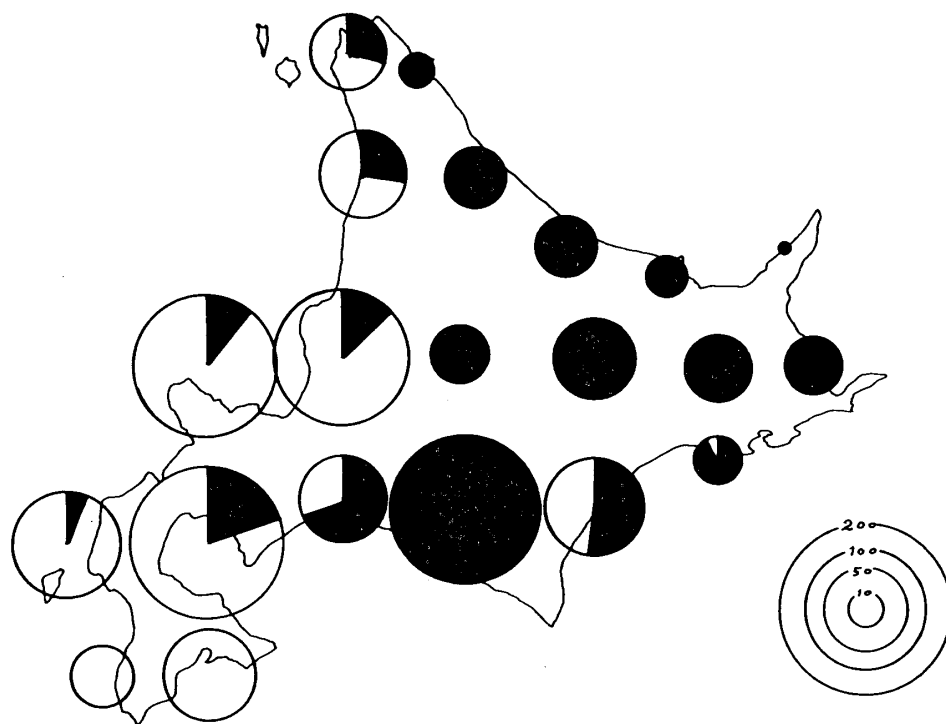
凡例にはこの松浦図は「シャモ地西海崖マシケ領ニ到ル迄又東崖アッケシ湾エトモ港等ハ記シ尽シ難キカ故漏ルモノ多シ」とあって、全地名を網羅していないとあるが、図中の漢字表記については「我カ函館府ニ納ル處ノ図ト地誌ヲ関シ玉ハンコト」と注記する。加えて図中に朱印で

運上屋、会所、泊り番屋等のほか「人家有ル処」、「蝦夷屋」、「蝦人出稼所」が記載されている。これも道南の「シャモ地ノ部ハ人家多キカ故ニ是ニ又漏ルモノ有」としてその総てが記載されていないことを記している。

この松浦図は測量した図ではなく、そのため川の位置や山の位置が後の実測図からみてずれているとか、松浦の日誌のなかで石狩川上流の調査が、あたかも石狩岳へ登らずに登ったと記すのは人をあざむくものだとする開拓使判官松本十郎や、永田方正、さらにライマンの批判にもかかわらず、小林の指摘するように<sup>(15)</sup> 松浦武四郎の仕事の大いさにはめをみはるものがあり、それは日誌類からみられる地誌のみならず、松浦図の地名は他に代わるものがないことから有効なことが明らかである。

## 2. 松浦図における集落の分布とその特徴

松浦図は全道にわたってくまなく河川名と集落名を主題とした地図として作成されているが、陣屋等の行政関係以外に和人とアイヌの集落の位置が記入されている。松浦が聞取をしながら書いた地名と、そこに存在する集落には何らかの関係があるのではという単純な疑問から、何軒をもって集落の基準としたかは解らないが、集落の数を26図幅ごとに数えた結果を本道分（北方2島もあるが）について作図した（第1図）。



第1図 安政期の集落分布 黒色……アイヌ集落 白色……和人集落

和人の集落 602, アイヌの集落 518, アイヌの出稼所 32, 運上屋と会所 104, 番屋（泊りを含む）286, 舟どまり（港）70を数えた。安政4～5年の調査とは、9年後が明治維新となり松浦武四郎も北海道開拓使と関係をもつことになるが、動乱の時期での武四郎の調査報告という点でその意義は大きい。<sup>(16)</sup> さて、明治に入る寸前の和人とアイヌの関係を集落数からみると、北海道開拓以前の最終の姿が写し出されている。

幕末において和人の占める割合は半島部から日本海岸の北端宗谷までと、日高を除いて十勝から釧路の漁場に及んでおり、最も著しい特徴として、道南の松前・函館周辺にはアイヌとして記載された集落はみられずすべて和人によって占められ、アイヌ集落は全集落のうち内浦湾では20

%, 積丹で11%, 増毛・石狩で13%, 苫前から宗谷にかけて28%と33%になり, 広尾から十勝川にかけて52%の36集落, 釧路で13集落中12集落(92%)となる。時代背景と集落構成が明治以降の変化を予見するやにみえる。そして和人の入らないアイヌの集落は上記以外のオホーツク海側と内陸部となるが, 日高の147集落は最多を示す。

人口では松浦図凡例に安政人別として1,000人以上のまちは箱館3万余, 松前3万余, 江差2万余とあり, これらは和人を主とし, 道南熊石6,353(ほとんど和人), 勇払1,180(80%和人), 十勝1,178(48%和人), 釧路(久摺)1,298, 沙流(日高)1,124となっている。つまりまちとしては箱館, 松前, 江差であり, 漁場として道南の漁村にやや大きなまちが形成されていたのであった。

### 3. 地域区分の範囲

地名を集計するため北海道を次の5つの地域に区分し, それぞれの地域ごとに沿岸部と内陸部に分けて地名数を集計した。その範囲は次の通りである。(第2図参照)

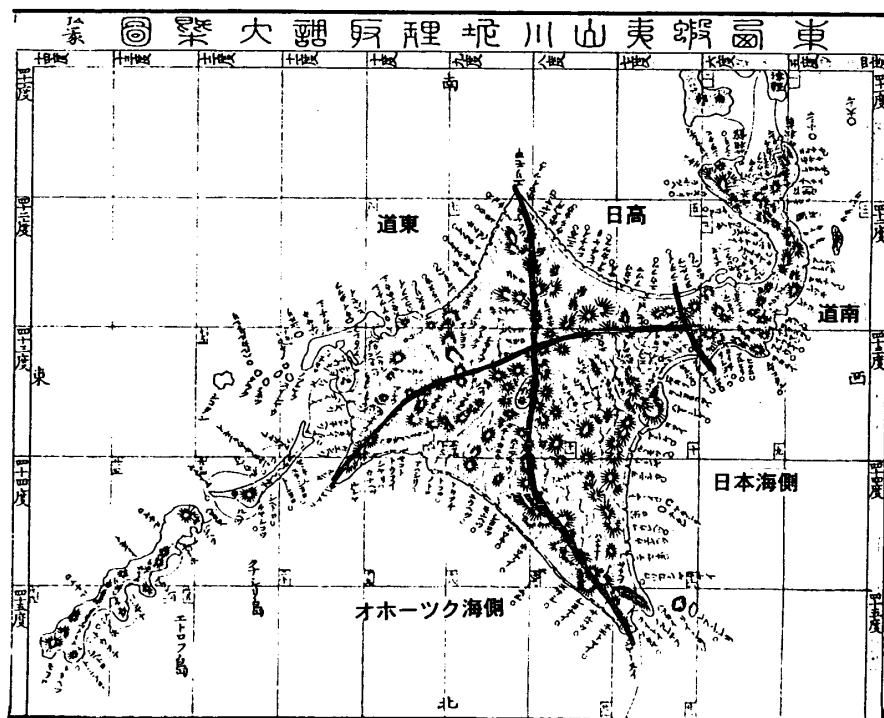
半島部……………後志・檜山・渡島の半島部全部

日高……………勇払から襟裳岬までの範囲で, 胆振・日高が含まれる。

道東……………襟裳岬から根室半島を経て, 知床半島の先端までの範囲で十勝・釧路・根室の全域

オホーツク海側……………知床半島北側から宗谷岬に至る網走・宗谷全域と一部上川北部を含む。

日本海側……………宗谷岬からほぼ現在の小樽あたりまで, 留萌・石狩・空知全域に相当する。



第2図 地域区分図

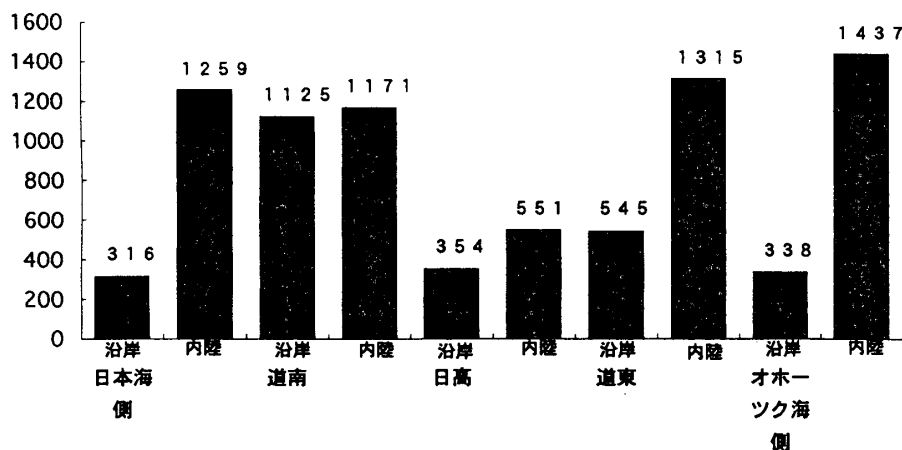
### 4. 表記された地名の特徴と地域別地名頻度

松浦図に記載されている地名数は永田の地名解よりも2,000余多い。ここでは地名数8,411のうち, 約78%を占めたナイ, ヘツ, ウシ, ホン, ホロ, シノ等24語を対象として考察する。<sup>(17)</sup>

松浦図には濁音・半濁音のないものが多いが、これは転写または木版のとき欠落したか、或は最初からついてなかったのか原図で調べていないが、ベツの43例はヘツに加えた。これは本来ベツまたはベツと呼ばれたものがヘツ 736 例になっているので、便宜上ヘツに統一した。同様にパンケ・ペンケはハンケ・ヘンケとなり、オンネ・タンネはネが子と表記されているので子のままとした。<sup>(18)</sup>

地名総数に対する各語の割合は、ナイ (21.3%)、ウシ (11.6%)、ヘツ (9.3%) が高く、5%代のホン・ホロ以外は 300 例以下で 100 例以上を数えるもの 8 (シノ・ヒラ・ヘンケ・ハンケ・シノマン・シリ・トマリ・オン子)、99 例以下 11 (ムイ・コタン・モイ・サツ・キナ・チセ・タン子・メム・サル・ハッターレ・サンケ) であった。

地名総数に対する各地域ごとの実数をみると第 3 図の様に、道南が一番多く 27% となり、道東 (22%)、オホーツク (21%)、日本海 (19%)、日高 (11%) となる。沿岸部と内陸部に分けた場合、沿岸部では道南が 42% と群を抜き、道東が 20%、他は 12~13% となる。内陸部では日高が 11% と少ないがそれ以外は 20~25% と大きな比率を占める。



第 3 図 地名の地域別沿岸・内陸別分布

これは地域区分をしたときの海岸線の長さの影響と、一方では集落分布との関係もみすごすわけにはいかない。松前・函館周辺でも和語と判明する地名は少なく、アイヌ語地名が大多数を占める。それにも拘らず道南の南側ではアイヌの集落は皆無であった。これは幕末には既に和人によって占拠されていたために、地名は残りながら独立したアイヌ集落はなくなっていたことを意味する。また日高が集落数では最多を占めながら地名数では 10% と少ないのは、やはり海岸線の長さと後背地との関係であろう。また内陸部に比率の高い他の地域は大河川と平地 (平野と盆地) の分布とサケ・マス漁撈河川との関係からみることができるであろう。

## 5. 主な地名の地域別分布とその特徴

採取した地名のうち 24 例の用語とその地域ごとの頻度の比率を示すと第 1 表のようになる。

### a) ナイ・ヘツ・ウシ

地名の最多数をもったナイとベツまたはベツ (ここではヘツ) とウシの分布を沿岸部と内陸部にわけてみると、沿岸部では第 4 図の様に 3 つの地名はそれぞれ 1/3 づつになる道東を除くと、いずれもナイが 50% 以上を占め、道南から日本海側に出て、オホーツク海側のいずれもが 56~60% と最多となる道南と道東の中間に日高がくる。ヘツは道東・日高が 32~33% と高いのに対して他はいずれも 10% またはそれ以下となり、沿岸部では日高・道東がヘツ地帯を形成している。ウシは日高を除く周辺はすべて 20~30% となる。同様に内陸部についてみると第 5 図の如く、ナイの

第1表 主な地名の地域別頻度 (%)

	総数	ナイ	ヘツ	ウシ	ホソ	ホロ	シノ	ヒラ	ヘンケ	ハンケ	シノマソ	シリ	トマリ	オンチ	ムイ	コタン	モイ	サツ	キナ	チセ	タン子	ムム	サル	ハンタリ ハツタル	サンケ
道 南	27.3	18.2	16.6	16.8	20.8	22.6	12.5	20.7	13.0	16.8	11.8	31.2	67.2	2.8	24.2	14.3	26.7	7.9	25.8	29.5	26.8	13.3	11.4	73.7	13.3
日 高	10.8	12.5	10.9	9.2	8.9	11.2	4.6	13.8	14.4	14.4	5.6	7.0	1.7	2.8	9.1	3.3	4.4	21.1	6.1	14.8	16.1	0.7	27.3	18.4	20.0
道 東	22.1	16.9	28.6	24.0	23.1	17.3	23.3	29.3	14.9	13.8	26.7	13.8	3.9	46.3	27.3	41.8	25.6	22.4	13.6	23.0	39.3	40.0	27.3	0.0	13.3
オホーツク 海 側	21.1	25.7	21.1	25.7	26.7	24.5	29.2	27.2	33.2	29.3	33.5	27.4	8.6	31.5	22.2	16.5	25.6	38.2	25.8	13.1	8.9	28.9	25.0	5.3	33.3
日本海側	18.7	26.7	22.9	24.4	20.6	24.5	30.4	9.1	24.5	25.8	22.4	14.7	18.8	16.7	17.2	24.2	17.8	10.5	28.8	19.7	8.9	11.1	9.1	2.6	20.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
地名総数	8,411	1,787	779	977	438	429	240	232	208	167	161	157	128	108	99	91	90	76	66	61	56	45	44	38	15
比 率	100.0	21.3	9.3	11.6	5.2	5.1	2.9	2.8	2.5	2.0	1.9	1.9	1.5	1.3	1.2	1.1	1.1	0.9	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.2

[註] 地名の意味

ナイとベツ nay, e-nai, 川, 谷川, 沢 Pet, i-beツ 川

南西部では pet を普通の川の意に用い, nay は谷間を流れてくる小さな川の意に限定している。

カラフトでは nay が普通の川の意, pet は特に小さな川を表すというが地名にはめったに現れてこない。但し古風では pet を普通に使う。網走・宗谷 nay 普通, 北千島 nay がない, pet は本来のアイヌ語で nay は外来語らしい。(知里) なおベツとナイについては山田の「アイヌ語種族考」の「内と別」(アイヌ語地名の研究1 山田秀三著作集84~97頁)「北海道のナイとベツ」(アイヌ語地名分布の研究) 同225~275頁参照。

ウシ usi ウシ, 語尾にウシのつく地名が多い。us-i-1) 名詞+usi……がそこに群生(庄・居)する所  
2) 動詞+usi……する。のか智いである。所

ホソ hon 腹, hon こぶ, ふし, 枝  
bor-o (不究) 水につける, うるかす, (水についている)

ホロ poro 大きい, 多い, pon に対する言葉, ボロベツ 大きい川(輻別), ボロモシリ 大きい島, ボロスツリ 大きい山

シノ ① 真の, 本当の ② (副) 真に, 本当に ③ 川の上流の枝わかれしている本流を親川と考えて Sino-と名づける, Sino-Apasir 真のアパシル 網走川本流上流をさす。

ヒラ→ピラ pira 崖, 樋平→豊平 ピラ・オロ pira-or 崖のところ, 広尾 ピラ・カ 崖の上, 平賀(山田)ヘンケ→ベソケ 川上の, ベソケト 川上の湖(山田)(知里)

ハンケ→ハンケ 川下, 川下の sino と同意, Sinoman-Rikumpet 真の・リカムベツ 陸別川本流の上流, sino 本当に, oman 山奥へ行っている

シリ shir 地, 山, 崖, 島 ウェンシリ 悪い山(水際の断崖)

シリ・ケツ・ナイ(尻岸内) 山裾の川, シリ・シェツ 山裾, シリ・ナイ→シンナイ 山川, チセ・ネ・シリ 家形山, チ・ノミ・シリ 我ら礼拝する山, ビンネ・シリ 男山, ボロ・シリ 大きい山(山田) / Sir, i-①大地, 土地, 所 ②山 ③水際のけわしい山, 断崖 ④目に見えるかぎりの空間 ⑤昼夜 ⑥天候 ⑦気候(知里)

トマリ Tomari 舟のかかる間, 舟から入ることができる入江, 碇泊港, ウェントマリ 宗谷 悪い泊地, モ・トマリ 静かな(小さい) 泊地

ラン子

ムイ

コタン

Onne オンネ① 老いる(老いてる) 親である, 大きくなる, (大きい方 オンネ, 小さい方 ボン) 昔は親子, Onne-enrun 大きい橋, Pon-enrun 子である崎一若い崎一小さい崎, onne-moy 大きい浦, Pon-moy 小さい浦, omne-nay 大川, Pon-nay 小川, omne-to 大沼, Pon-to 小沼 moy-e ムイ ①たば, 束 ②箕 ③オーバンヒガラガイ ④moy 浦のなまり ⑤山頂/イム・ネ・シリ 無意根山, 箕のような山

kotan-i-ム 部落, 村, 家1軒でもある時期だけ仮住する場所もコタンである。mosir と同じく国土・世界といった広い意味でも使われる。蒙古文語で町, 城壁, 垣などを意味する gotan, ゴリドの xotan, 満州語の hotan, キリヤクの hotan 等に関係があるのではなからうか。/オ・コタン・ウツン・ベ川尻に部落あるもの→オコタヌンベ moy-e, -he (k) モイ 浦, 入江, 入海 ②川の曲り角の水のゆるやかな流れるところ ③山名の中で平地が湾のように入りこんでいる所 mo-i 静かな所 オタ・モイ 旗の入江 ニ・オ・モイ 寄木の多い大江 ボロ・モイ 輻向 大きな入江, 大川の広くなった入江形の地

Set (完) 水のかれている 乾いている(知里) / オ・サツ・ナイ 川尻の乾く川 於礼内, 長知, サツ・ナイ 乾く(乾いている) 川 サツナイ 礼内, 幸震(山田)

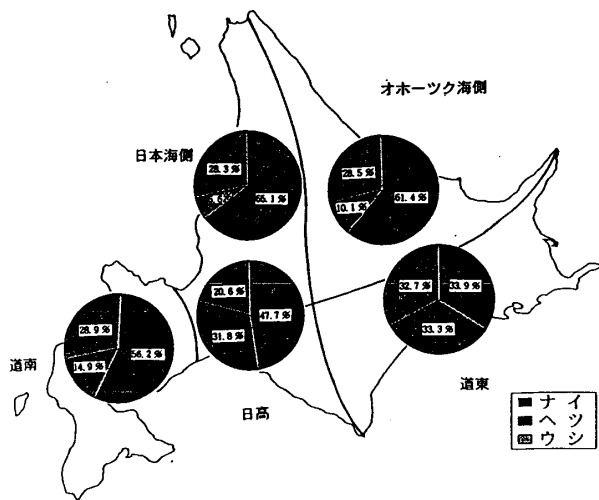
kina 草(知里) キナ・ウス・ナイ 黄田内 草群生する川(或は浦川) 浦をシ・キナという(山田) Chise 家, クマの穴

タン子 Tanne (完) 長くある(ナル) / タンネ・ウェン・シリ 手稲山, 長い断崖 mem ①泉池, 湧きつば, (近文) 古い小川, 古川の跡の小川, / マツサムムム 野の傍らの泉池, メモロベツ, ムムオロベツ 芽室, 泉池の処の川

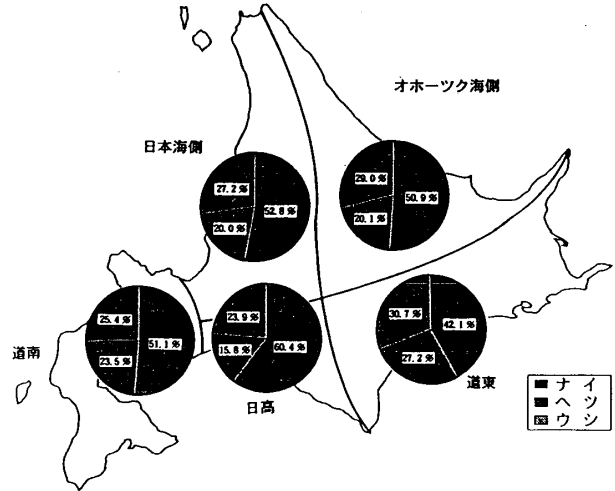
sar 葦原, 蘆原, 沼地, 泥炭地 ②やぶ, しげみ, / 沙流 (川), 針里, Pinne-Sar 男のサル(斜里) Matne-Sar 女のサル(沙流) / ビンネシリ(雄山), マンネシリ(雌山)

サリ, ボロ, ベツ 葦原が広い川→サチボロ→札幌 サツ・ボロ・ベツ 乾く大きな川 サル・ベツ, サルウツンベツ→サルンベツ の, がある 葦原の川 水が深くよどんでいるところ, 淵 ハツタル・ベツ 淵の川「八垂別」(山田)

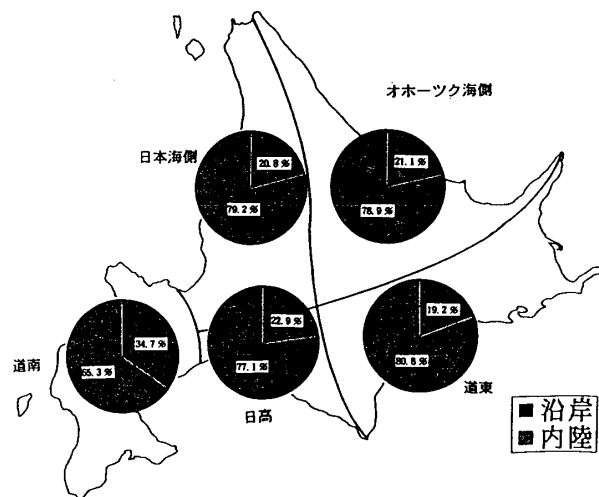
sanke つぎ出す ヘンソナー(へ・サンケ・イ) 峠・頭をつぎ出ししているもの(山田)(知里) 真志保「地名アイヌ語小辞典」及び山田秀三「アイヌ地名十二語」による



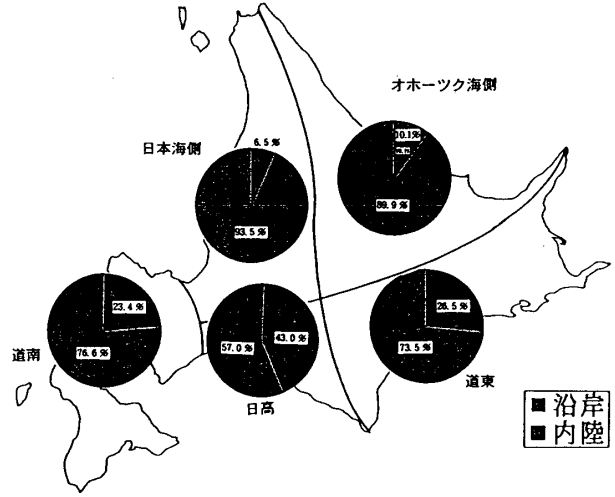
第4図 沿岸地区のナイ・ヘツ・ウシの割合



第5図 内陸地区のナイ・ヘツ・ウシの割合



第6図 ナイの沿岸・内陸別割合



第7図 ヘツの沿岸・内陸別割合

占める割合は5～10%減少するが、大勢は変わらない。道東と日高と道南のヘツが増加する。両者を合わせると、ナイ・ヘツ・ウシの合計のなかでナイの占める比率が高い順に並べてみると道東<オホーツク<道南<日高<日本海となった。

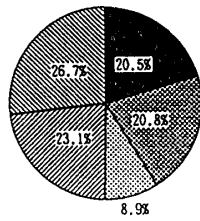
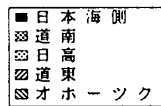
次にナイとヘツについて沿岸と内陸の割合をみるとナイは、いずれの地域も沿岸と内陸の相対比において大きな変化がない。即ち2：8程度で納まっているが、道南のみが沿岸で30%を超えている。(図6)

ヘツはナイと異なり沿岸と内陸との比の地域差が著しい。道南のナイの比(内陸6, 沿岸4)に似ているのは日高のみで、他は沿岸部が1/4以下となり、特に日本海とオホーツクの北側が10%或いはそれ以下となっている点が注目される。(図7) 沿岸と内陸を加えた地域別の相対比ではオホーツク(18.3)<日本海<日高<道南<道東(28.6)となる。つまり道東はナイが相対的に少なく、ヘツが多くなっている。

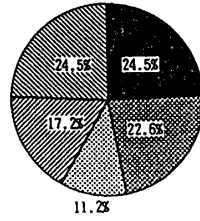
ウシは日高(20.2%)<日本海<道南<オホーツク<道東(31.2%)と東に向かって比率を延ばす。地域区分では日高という名称を付したが、胆振の相当部分が含まれている点注意を要する。

#### b) ホン・ホロ・ヘンケ・ヒラ・シノ

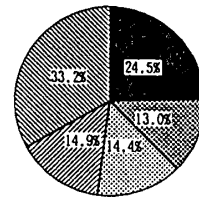
採取地名総数200～500の上記地名用語の各地域別比率は第8図の様に変化がみられる。これを各地域ごとにまとめてみると、ホンは北海道の東半分のオホーツク海側と道東で50%、日本海側と道南で41%となり、日高が少ない。ホロは日本海とオホーツクの北半分が多く、道南が次点



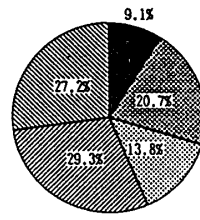
ホン



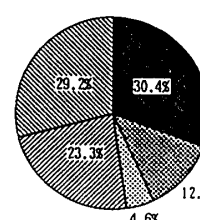
ホロ



ヘンケ

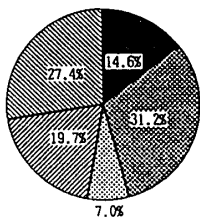
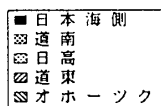


ヒラ

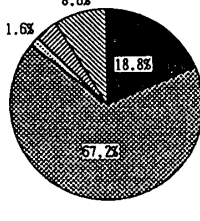


シノ

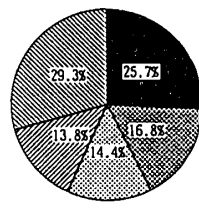
第8図 用語別頻度数の比率 (200~500)



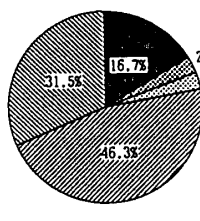
シリ



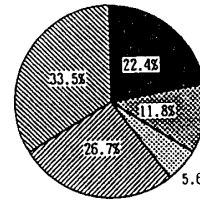
トマリ



ハンケ



ラン子



シノマン

第9図 用語別頻度数の比率 (100~200)

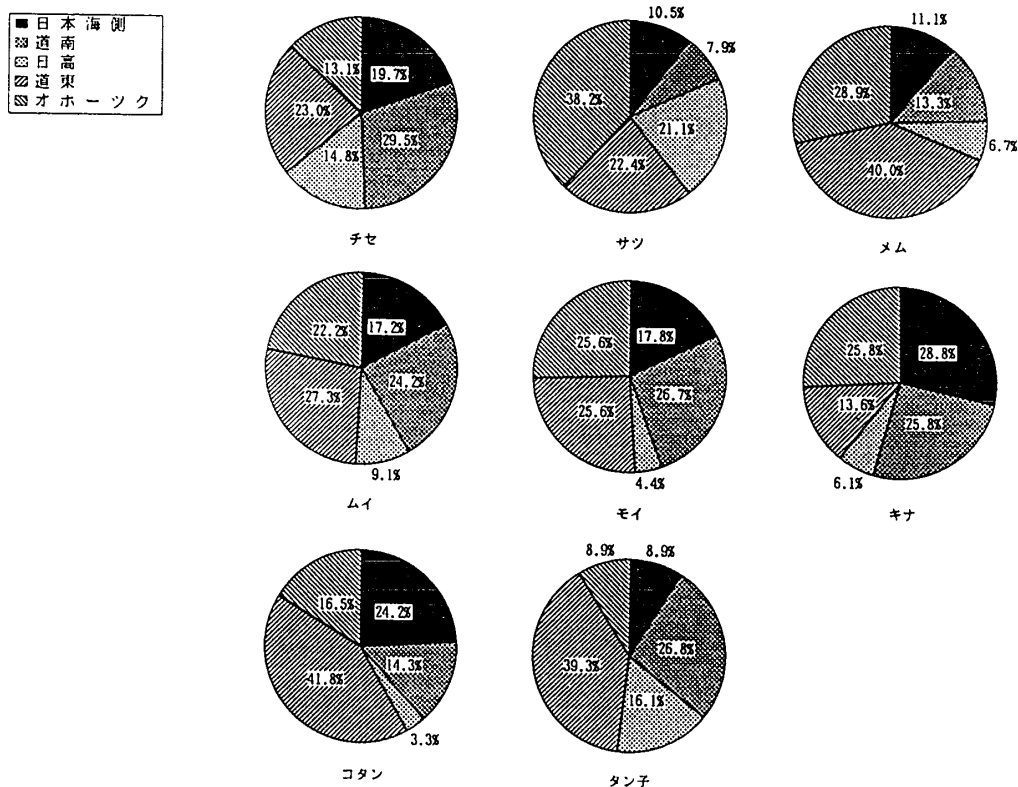
点となる。ヘンケは同様に北半分に58%が集中する。ヒラは東半分の道東とオホーツク側に、シノは北半分と道東が中心となる。

#### c) シリ・トマリ・ハンケ・ラン子・シノマン

各地名の採取総数が前者より少なく 100 ~ 200 となるが、その配置は第9図の如く、シリは道南に厚くオホーツクと道東に濃い。トマリは道南に集中し日本海がこれに次ぐ。ハンケは各地域共同率に近く、ラン子は道東が半数を占め北側がこれに次ぐ。シノマンはオホーツクに多く日本海と道東がこれを支える形をとっている。

#### d) ムイ・コタン・モイ・サツ・キナ・チセ・タン子・メム・サル・ハッター・ハッタル・サンケ

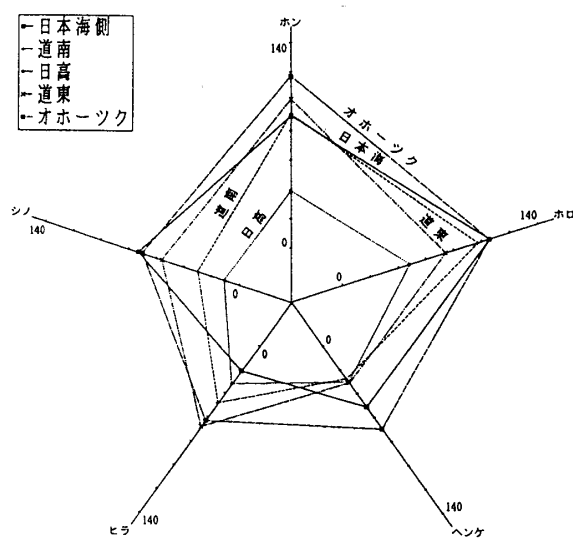
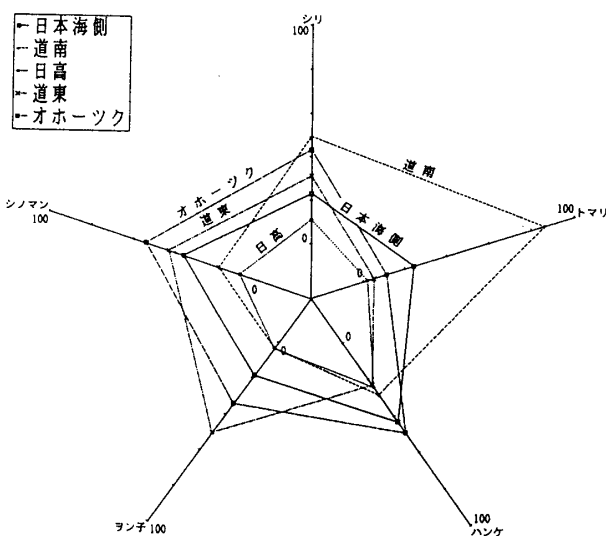
各地名総数 100 以下のもので、その配置は割合変化に富んでいる。第10図の如く、先のオネの様にある地域に集中するものをみれば、40%前後に集中する地域が道東の場合にはコタン・タン子・メムであり、オホーツク海側に集中するものにサツ・サンケがある。道東とオホーツク海側、つまり東半分に50%以上の比率となるものはコタン・モイ・サツ・メム・サルであり、オホーツク海側と日本海側つまり北部に50%以上となるものはキナとサンケであった。採取数が少ないハッターとハッタルは一緒に合わせたが74%が道南で、同類は前記のトマリであった。以上述べた24例を北半分（日本海側とオホーツク海側…北北海道）と東半分（オホーツク海と道東…東



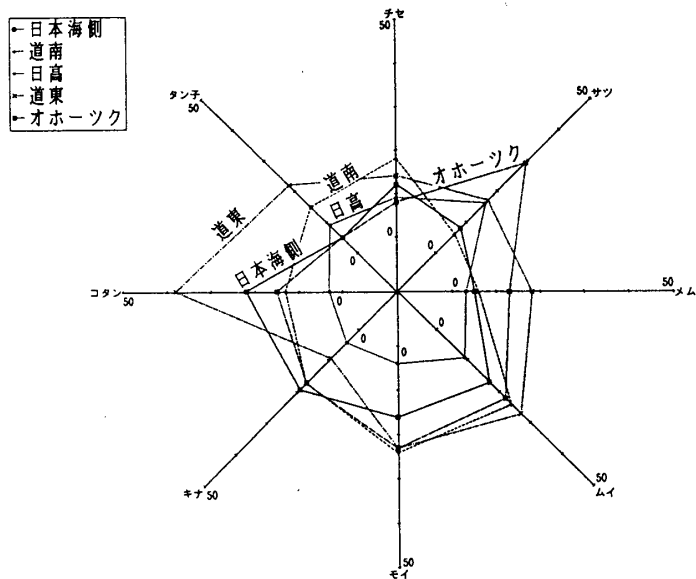
第10図 用語別頻度数の比率 (50~100)

北海道)という少し大きな区分でその比率をみると、各地名の語彙に地域差のあることが解る。第8, 9図についてみると、北部に多いものはナイ・ウシ・シノ・ヘンケ (ペンケ)・ハンケ (パンケ) であり、東部に多いのはヘツ・ヒラ・シノマン・オン子で、トマリがハッター・ハッタルと同様に道南に集中しているのである。

以上の結果を逆に実数でその配置を見直してみると、第11~13図のようになる。この図は各語の実数を各地域がどの様に結びつくかをみるため作ったものであるが、第11図の場合5角形が変形していればその変形している地域に問題があるわけで、5角形または第13図の8角形の変形に注意すれば結果が得られる。第11図では余り大きな変形はみられないが、日本海側が他地域よりヒラ・ヘンケにおいて異常を示す。第12図ではトマリがいずれも少なく変形5角形を呈するが、特

第11図 用語別地域別頻度数  
(各地名頻度数 200~400)第12図 用語別地域別頻度数  
(各地名頻度数 100~200)





第13図 用語別地域別頻度数（各地名頻度数 100 以下）

に道南だけがトマリが著しく多いという点で特色を示し、シノマン・オン子では他より少ない。また道東にラン子（オンネ）が他より多いこと、トマリ・シリ・シノマン・ラン子が順不同となる。第13図ではコタンとサツとメムの移動が著しく、コタンとタン子の道東、日本海側、サツのオホーツク海側に特徴がみられる。つまり、採取地名の多いものは或程度のグルーピングが容易であるが、数が少なくなると、それぞれの特徴が顕著に現れたのである。

以上の結果から見ると、アイヌ語地名のグルーピングによる区分線は、道央と道東を区分する天塩山地から日高

山脈を境界線とするものと、石狩低地帯で道央と半島部に区分される。一方、夕張山地から大雪山系の南限を通り知床半島へ抜ける境界によって北部と南部とに再分割され、それぞれの地帯における地名分布の特徴が見られるのである。これは大部分の語句の分析を行った後でなければ言えることではないが、上記の僅かな例からも解るように北部には樺太系（仮称）の人々、道東とオホーツクには樺太系と千島系（仮称）の人々、半島部には旧東北系（仮称）の人々とそれぞれ関連があったと考えてもよいのではなかろうか。いづれにせよその理由は解らないが、おそらくアイヌ民族の発展の歴史の中にその鍵が秘められていることは確かである。

## 6. ナイとナイに結合する語彙との結合関係

ナイは川、谷川、沢のことで、南西部でペッ・ヘツが普通の川で、ナイは谷間の小川となる。オホーツク海側ではナイが普通の川になって、山中の溪流がペッ・ヘツとなる（知里説）<sup>(17)</sup> という。ナイの比率は全体の 21.3% で最多数を占め、特に北部（日本海とオホーツク海側）で 52% を占めていて、南部に少ない。そこでこのナイとナイに結合する多出する語彙との結びつきについてみてみよう。

先づ最初にウシ・ヲマナイ・ホロ・ホンとナイとの結合についてみると、ウシ 37%, ヲマナイ 32%, ホロ 17%, ホン 14% で、この 4 語の各地域での分布は第 3 表の如く、日本海側 35%, オホーツク海側 30%, 道南 14%, 日高 9% となり、北部に 65% が集まり、南部が 24% となる。ホロ・ホンは道南に多く、北部ではウシ・ヲマナイ・ホロ・ホンのいずれもが完備する形をとっている。

第 3 表 ナイと結びつくウシ・ヲマナイ・ホロ・ホンの分布（実数）

	日本海岸		道 南		日 高		道 東		オホーツク海側		合 計
	沿 岸	内 陸	沿 岸	内 陸	沿 岸	内 陸	沿 岸	内 陸	沿 岸	内 陸	
ウ シ	23	61	6	14	7	16	7	20	11	47	212
ヲマナイ	9	58	1	18	1	10	3	19	21	45	185
ホ ロ	6	20	7	17	3	8	3	8	1	19	95
ホ ン	8	13	2	16	3	4	3	8	6	22	82
合 計	46	152	16	65	14	38	16	55	39	133	574

「ナイ」という河川に関する語の前か後に他の語が加わることによって、ある意味をもつ地名が形成されるから、それらの組み合わせからみた形式の違いと、地域差がみられるであろうか。ここでは「ナイ」をRとおき、ウシ・ヲマナイ・（ここではヲマナイを1語とみなし、ヲマ・ナイとは分けなかった）ホロ・ホンをrとし、それ以外の語を任意にa・b・cとする。これは、上記4語が最多用語であったためである。但し aR はここではヲマナイのみとした。

例 arR

チフタウシナイ……船が集まっている川

チフタ……a      ウシ……r      ナイ……R

例 rbR

ウシホリカナイ……逆流してながれる川、後戻りしている川

ウシ……r      ホリカ……b      ナイ……R

第4表 ナイの結合形式とその比率

	日本海側		道 南		日 高		道 東		オホーツク		合 計	
	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%
ar	67	14.0	19	5.8	10	4.5	22	7.3	57	12.4	175	9.8
arR	60	12.6	22	6.7	23	10.3	30	9.9	62	13.5	197	11.0
arbR	7	1.5	3	0.9	2	0.9	1	0.3	5	1.1	18	1.0
arc	0	0	0	0	1	0.4	0	0	9	1.9	10	0.6
rbR	26	5.5	22	6.7	7	3.1	14	4.6	29	6.3	98	5.5
rR	13	2.7	15	4.6	8	3.6	4	1.3	10	2.2	50	2.8
rRc	2	0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.2
ナイ総数	477	26.7	326	18.2	223	12.5	302	16.9	459	25.7	1,787	100.0

まず、形式とその比率（表4）についてみると、ar, arR が最も多く、rRc にいたっては1%にもみえない。

地域別では、ar は道南と日高に少なく、日本海側とオホーツク海側では約80%となる。これに反して arR になると道東と日高の割合が多くなり、日本海側のみが40%をきっているが極めて低いというものではない。arbR は、道東がやや低めというだけで、どの地域も5%前後と低めに平均化されている。rbR は、日高とオホーツク海側がほぼ同じ割合で、他の地域より少ない。この関係は日高、オホーツクが接続することによって、他の結合関係とは異なっている。

rR では、道南がドミナントに抜け出ており、他の4つの地域は、日本海側と日高、道東とオホーツク海側という組み合わせでほぼ同じ割合である。この関係はちょうど宗谷岬からえりも岬、即ち天塩・日高ラインに相当し、その東西差となって現れている。arc と rRc に至っては、多少の使用例がみられるにすぎないので省略した。

次に、若干の使用例を示せば次のようなものである。

rR （道南抜粋）

- ・ホロナイ……大きい川  
ホロ＝ポロ (Poro) 大きい
- ・ホンナイ……小さな川  
ホン＝ボン (Pon) 小さい

arR （道南、日高抜粋）

- ・チフタウシナイ……船が集まっている川

チフ=チプ (Chip) 船

タ (Ta) そこ

ウシ (Us) 群生する, 群居する

- ・モセウシナイ……イラクサの群生する川, または草刈をいつもする川

モセウシ (Moseus) イラクサの群生する

- ・ホロソウウシナイ……大きな滝がある川

ホロ=ポロ (Poro) 大きい

ソウ=ソー (So) 滝, 波かぶり岩

ar (日本海側, 道東, オホーツク海側抜粋)

- ・クヲマナイ……仕掛弓のある川

ク (Ku) 仕掛弓

ヲマ (Oma) 存在する, ~にある

- ・ケナシハヲマナイ……川岸の林のかみにある川

ケナシ (Kenasi) 川ばたの林, 林の, パ (Pa) かみて

- ・ヌツハヲマナイ……一様の深さでゆるやかに流れるかみての川, 瀬の上手にある川, 野原の上手にある川 (山田説布部の例)

ヌツ (Nut) 川が一様の深さでゆるやかに流れている所, パ (Pa) かみて

- ・チホヲマナイ……チェフヲマナイ (松浦日記) 魚のいる川, チェプ (Chep) 魚, オマ ある, いる, ナイ 川

- ・フンヘヲマナイ……くじらがいる川

フンヘ=フンペ (Humpa) くじら

- ・ヒラヲマナイ……崖のある川

ヒラ=ピラ (Pira) 崖

- ・シユルクヲマナイ……とりかぶとの根がある川

シユルク (Sur-k) とりかぶとの根, Shurku-oma-pet 尻駒別川 (山田説)

- ・テシヲマナイ……魚を捕る施設のある川

テシ (Tes) 魚を捕るトメ(止), 木や柴で川瀬を横断する垣を造り登ってくるサケ, マスを捕る施設。ヤナ (梁)

rbR (日本海側, 道東抜粋)

- ・ウシホリカナイ……逆流して流れる川, 後戻りしている川

ウシ (Us) 群生する, 群居する, 生きている

ホリカ (Horka) 逆さ, 後戻りする (山の方へ向かっている川の流れが途中で海の方へ向きをかえる) 支流

- ・ウシヤツナイ……乾いた川

ウ (U) おたがい (が, の, に) sat-nai 乾く川

- ・ホンシヤリヲマナイ……小さい (子の) 葦原 (湿原) のある川

ホン=ポン (Pon) 小さい, 子の

シヤリ=シヤル=サル (Sar-i) 葦原, 湿原, 沼地, 泥炭地

- ・ホロヒンナイ……大きく細く深い川

ホロ=ポロ 大きい, 多い, 親の

ヒンナイ=ピンナイ 細くて深い谷川, 細く深い沢

## む す び

松浦武四郎の東西蝦夷山川地理取調図の地名のデータ作りをした結果の一部について考察した。幕末以前の北海道の地理的資料が殆どないことから、松浦図について、地名ではいろいろ言われているものだけにその取扱いに少々手間どった感がないではない。しかしデータベースで整理してみると、地名の語彙の結びつき方に以外と解りやすい部分と、全然不明なものとの区分が容易となった。また明らかに地図上のミスプリントも見つけることができた。

この拙論では地図上から読みとれる範囲で、和人居住区とアイヌ居住区が区別でき、幕末までに和人は道南全域から宗谷の海岸まで多くの集落を形成していたこと、その境はおそらく天塩山地から内陸には入らずに沿岸部を主としていたであろうこと、道南から内浦湾を経て胆振の海岸沿いに鶴川あたりまで、沙流川をはずして広尾から十勝川川口を経て白糠までの海岸沿いに、釧路・厚岸までその一部が入っていた。日本海側の内陸、オホーツク海側全域、日高と道央と道東は未だアイヌ民族のエクメネであった。しかし和人の居住区が拡大していたとはいえ、漁業または商人・役人の拡大であったから、地名に和文字が入ったとしても、意外にその数は少ない。動乱の時代をむかえるにしても地名にまでは余り大きな影響を及ぼすことはなかった。明治以降開拓使時代からの農業開拓によってアイヌ語地名の和文への転化と新地名の出現が現在の地名の原形となったのである。

松浦図から採取した地名数は永田の地名解よりも多いが、場所の確定にむつきしさがあがり、加えて武四郎の書物からの批判によって、正当に評価されるようになるのは昭和も後半に入ってからであった。松浦図の地名を部分的に取扱ったものはみられるが、地名全部についての考察は未だ聞いていない。そこで、そのデータベースを作ってマクロの分析をすることが本稿の目的であった。ここでの結論は次の様に要約できる。全体の地名の42%にナイ・ヘツ・ウシがある。ホンとホロで10%、シノ・ヒラ・ペンケ・パンケ・シノマン・トマリで15%、オンネ・ムイ・コタン・モイ・サツ・キナ・チセ・タンネ・メム・サル・ハッター・ハッタルで9%となった。これらの地名の地域配分を全道を5地域、沿岸・内陸に分けて集計した各地名の配分は、それぞれが同じではなく異なる配分をもつこと、つまり地名の地域性のいくつかがみられたのである。また一番多く現れたナイについて、ナイと結びつくウシ・ヨマナイ・ホロ・ホンと他の語彙との結合をみると3語彙の結合が一番多く、上記2語の前につく場合と、両語の間に入る場合では前者が22%、後者が8.5%となる。そしてこの組合せには地域性がみられた。今後はここにあげた以外の地名について考察してみたい。かつて金田一の行った東北の地名との関係も地誌的方法で考えてみたい。それはアイヌ語地名のグルーピングによって道央と道東、日本海とオホーツク海側の道北（普通に言う道北よりも広い範囲を含む）、道南という、北海道の形を三角形の組合せとするならば、それぞれの三角形のなかに地名の秘密がみえかくれするからである。これはアイヌ民族発展史のなかで解かれるべきものでもあろう。なお本稿は4名の協同作業の結果であり、文責は内田にある。なお佐藤真理君に協力を得たので御礼を申し上げる。

## 註

- (1) 奏 櫛麻呂 東蝦夷地名考 文化5 (1808) (アイヌ語地名資料集成)  
 奏 櫛丸と号す村上島之丞のことで、近藤重蔵について東蝦夷地(寛政10, 1799)西蝦夷地(享和元, 1801)を踏査、蝦夷島奇観、蝦夷生計図説(文政6, 1823 日本庶民生活史料集成4巻所収)を残す蝦夷文献の白眉であろう。
- (2) 上原熊次郎 蝦夷地名考 里程記 文政7 (1824)  
 上原熊次郎 もしほ草 寛政4 (1792) アイヌ語資料叢書所収 国書刊行会 昭47 日本で初めてのアイヌ語辞書  
 上原熊次郎 蝦夷語集  
 バッチェラー以前のアイヌ語辞書では最も多い語彙数がある。
- (3) 松浦武四郎 蝦夷地道名国名郡名之儀申上候書付 明治2 (1869)
- (4) 伊能 忠敬 大日本沿海輿地図中図(実測図伊能中図) 文政4 (1821) 武揚堂復刊 平成5
- (5) 永田 方正 北海道蝦夷語地名解 明治24 (1891)
- (6) B.H. チェンバレン 中川 裕訳 アイヌ語地名の命名法 1887 (アイヌ語地名資料集成解説参照) 昭和63  
 (B.H. Chamberlain The Language, Mythology and Geographical Nomenclature of Japan, Viewed in the Light of Aino Studies)
- (7) J. バッチェラー 中川 裕訳 アイヌ地名考(同上)  
 J. Batchelor The Pit-dwellers of Hokkaido and Ainu Place-Names Considered 1925  
 なお、ジョン・バッチェラーのアイヌ・英・和辞典 第4版の解説(1938, 1981 岩波)と蝦和英三対辞書初版の復刻(1980 国書刊行会)の解説、(10)ー2 知里真志保著作集4 アイヌ語入門はバッチェラーを読む前にみる必要がある。
- (8) 金田一京助 北奥地名考 (アイヌ語地名資料集成 昭和63)
- (9) 高倉新一郎・知里真志保・更科源蔵・河野広道 北海道駅名の起源 昭和25, 29
- (10)ー1 知里真志保 地名アイヌ語小辞典 昭和31  
 ー2 知里真志保著作集 第1〜4巻 昭和49
- (11)ー1 山田 秀三 北海道のアイヌ地名十二語 昭和44 (アイヌ語地名の研究I所収)  
 ー2 山田 秀三 東北と北海道のアイヌ語地名考 昭和32  
 ー3 山田 秀三 アイヌ語地名の研究第1〜4巻 昭和57  
 ー4 山田 秀三 北海道の地名 昭和59
- (12) 山田 秀三 アイヌ語地名分布の研究 註(11)ー3 アイヌ語地名の研究1 187〜34頁
- (13) 松浦武四郎 東西蝦夷山川地理取調図 安政6 (1859) 昭和63 草風館
- (14) 北海道の4区分図は明治末年に北海道の農業地帯区分に用いられ、方法は単純だが、脊梁山系で四海面区となるため使われた。松浦の東西蝦夷山川図(1859)では行政区画資料であるから、(もっとも松浦によって北海道や道庁名の原形が作られたのだが)各河川によって判断することも可能ではあるが、今回は海面区→地域区分という単純化を行った。
- (15) 小林 和夫 松浦武四郎の石狩川踏査 北海道地理 No53 1979  
 小林 和夫 コタンとその立地 北海道地理 No62 1988
- (16) 松浦武四郎の蝦夷地に関する日誌、紀行は丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌上の秋葉実による解題参照、北海道出版企画センター 昭和57  
 三航蝦夷日誌 嘉永3 吉川弘文館 昭和45  
 竹四郎廻浦日記(丙辰日記) 安政3 北海道出版企画センター 昭和53  
 丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 安政4 会所 昭和57  
 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 安政5 会所 昭和60
- (17) 註(11)ー1 から オイ・ベツ・ヒラ・サル・ポロ・シリと註(11)ー1 から計33語を選んだ。
- (18) 子音の「破裂音 k, t, p, g, d, b 無声音 k, t, p とそれに対する有声音 g, d, b とはそれぞれ同一の音韻に属し、両者を置換えても語義に影響は無い。しかしながら純正な発音では総べての破裂音が無声なることを原則とする」(知里:アイヌ語法概説: ) p と b は同音なのでベツ・ベツは解るがヘツとなぜ山川図に記載されたか不明・木版であるのでおちたのか程度にしか推測できない。或は原図をみていないので誤っているのかも知れない。ポロも同様にホロ(水につける、水・についている)なのか、ポがホになったのか不明、しかし大部分が山川図ではホロなので同義として取扱った。